



Title	国語問答 : ホワン・デ・バルデス(翻訳-8)
Author(s)	中岡, 省治
Citation	Estudios Hispánicos. 1985, 10, p. 19-51
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93880
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

国語問答：ホワン・デ・バルデス (翻訳— 8)

中 岡 省 治

これまで7回（大阪外国語大学学報，第30号，36号，56号，59号，62号；*Estudios hispánicos* 第6号及び第9号）に，Juan de Valdés 著，*Diálogo de la lengua* の翻訳をおこなってきたが，以下はその続きであり，また今回で一応この *Diálogo* を最後まで訳出시켰ことにもなる。

この翻訳には，Juan de Valdés, *Diálogo de la lengua*, edición y notas de José Montesinos, Clásicos Castellanos, No. 86 (Madrid, 1953) を底本として用い，その他に，以下に挙げる諸本を適時参考とした。

またこの言語問答には Valdés 以外に三人の対話者，Marcio, Coriolano, Pacheco が参加するが，これら問答者を訳文では夫々の頭文字で示している。なお，以下の訳出部分は上記テキストの 179 ページ 9 行目から 195 ページ 7 行目までに該当する。

テキスト類

Gregorio Mayáns y Siscar, *Orígenes de la lengua española*, Juan de Zúñiga, Madrid, 1737 (tomo II, págs. 1–178, con el título de *Diálogo de las lenguas*).

J. de Valdés, *Diálogo de la lengua*, Biblioteca Clásica Universal, No. 12, prólogo y notas de Felix F. Corso, Buenos Aires, 1940.

Juan de Valdés, *Diálogo de la lengua*, Clásicos Ebro, No. 18, selección,

estudio y notas por Rafael Lapesa, Zaragoza, 1965.

Juan de Valdés, *Diálogo de la lengua*, Clásicos Castalia, No. 11, edición, introducción y notas de Juan M. Lope Blanch, Madrid, 1965.

Juan de Valdés, *Diálogo de la lengua*, Sepan Cuantos ... , Núm. 52, prólogo de Juan M. Lope Blanch, México, 1976.

V. もしこの *Amadís* の書をずっと辿ってゆくのであれば、あなた方にいろいろ驚くようなことごとをも披露できるのですが、これも望めないの
で、諺にもあるように、「宵宮から本祭を引き出し、見本から生地の色を読み取ってもらう」^① しかありませんね。こんなことをいうのも、私としては実に不本意なのですが、あなた方が、私の「*Amadís*」に対する意見を聞いて実に驚いた、といったので、これに答えるためであり、悪口をいったり、他の人たちがすることをけなしたりして、嬉しがっているのではないのですよ。しかし皆さんに知っておいてほしいのは、私は「*Amadís*」を評してあれこれといいましたが、この作品には沢山の、とっても優れた点があること、これに加え、それはカスティリア語を覚えたいという人たちが読んでしかるべき本だ、ということなのです。但し、皆さん方がそこで目にするものの全部を、正しいと見做して使っていいかという、そうともいい切れないのだ、ということをも覚えておいてほしいですね。

M. それは忘れないでおきましょう。さて、イスパニアの国王の歴史を扱ったもののなかで、これは立派な文体の作品だ、とお考えのものいくつかありますでしょうね。

V. 正直いって、これまで私がみた作家のなかでは、無条件に推奨できるほどに私の気に入った作者はいませんね。Diego de Valera 師は、「Valeriana」の著者で^②、多弁、多彩な書きっぷりで、好ましい言い方をしているようにみえますが、どうも私の趣味には合わないし、私としては、彼を派出で、いい加減なことを書く人だと思うのですよ。私はまた、この人が国王 Juan 2 世陛下の年代記の一部をも書いたのではないかとも思うのですが、この年代記には、あれこれと違った文体があるので、作品全体についての判断は下しかねますね。しかし、私のみるところ、カスティリア語

に関する点では、「Amadís de Gaula」,「Palmerín y Primaleón」に次いで読んでしかるべきものでしょうね。

P. しかし、私には、あなた様が Diego de Valera 師にそんなにむごい扱いをされるのが不可解ですね。あなた様の故郷の出身ですし、またカスティリア語で沢山の、しかも実に立派な著作を書き残している人なのに、あなた様なぜ Valera 師を多弁で、いい加減なことを書く作家だなどとおっしゃるのですか。

V. 私と故郷が同じかどうか、そんなことはどうでもいいのです。というのは、私としては、たとえポーランドで生れ育っても、人間としての徳と能力とが私を満足させるような人こそ、私と故郷を同じくする人だと考えておりますのでね。また、私は Diego 師を“多弁家”といいましたが、これは彼がいろいろと弁を弄するのが好きなうえに、その書いているもののなかには、なきもがなの的外れなことが、多すぎるからなのです。“いい加減なことを書く人”といったのは、彼が事実とされる事柄のなかに、あったこともない多くのことを、自分が調べ上げたもののようにして、真実めかして沢山に混ぜ込んでいる様は、他の話までもが信用できなくなるほどののです。つまりですね、例えてみれば、セゴビアにあって水道橋と呼ばれるあの水路は、ヘラクレスの甥のイスパン (Hispan) によって作られたというのですが、これは、今日その水道橋に刻まれた文字からも明らかのように、ローマ人の作ったものですね。また、コルーニアの人たちは、その塔の鏡のなかで、アルモニダス族^③の艦隊がやってくるのを見たのですが、その艦隊は木の枝で擬装していたので、てっきりそれが新発見の島であると思い、防御体制をとらなかったのだ、それがためにそこを占領されてしまったのだ、とかいうのです。これに類することを沢山書いていますので、私が彼のことを、“嘘を書いている”といっても当然だと思いますよ。但し、誰か彼を弁護して、そんなことも彼が思い付いたのではなく、余人の書いたものを捜し出してきたのだ、とでもいうのなら、彼を“嘘を書く人”というのはやめにして、今度は“思慮を欠く人”と呼びたいですね。というのはね、物書きの心すべきは、自分の読んだものを正しく利用し、そこから取るべきは取り、捨てるべきは捨てる作業を的確におこなうことであり、これのままならぬ人は、正確な判断力を欠くことを露呈していることになり、私の思うところでは、そういう人

として世間の信用を失ってしまうのですからね。

P. そのお話はもう十分です。私としては、どう呼ばれようとも構いません。

M. 「Celestina」についてはどうお考えですか。あなた様、その作品がお好きということでお尋ねするのですが。

V. 私は、その作品の始めを受け持った作者の創造力は高く買いますが、まとめ上げるのに当った人の力倆はそれほどとは思いませんね。2人の作者の判断力には、私満足しています。というのは、私のみるところ、実に巧みに、鮮やかに、その作品に登場させた人物の人間性を描き、始めから終りまで登場人物の品位を落さないのも立派ですね。

M. 登場人物のうち、あなた様は誰と誰とがよく出来ているとお考えでしょうか。

V. Celestina の役作りが、私のみるところ、目ざといやりて婆としてあらゆる点で完璧ですし、Sempronio と Parmeno の役作りもうまくいっています。Calisto も悪くありませんが、Melibea はもう少しよくなるのではありませんか④。

M. それはどんな箇所ですか。

V. 彼女が恋の力に負けてしまい、直ぐに男性を好きになるというだけではなく、不しだらな愛欲の喜びにも溺れてしまう点なのですよ。

M. おっしゃる通りですね。

P. ですが今は、この哀れな婆さん、Celestina の細かな分析をするのはお止めいただきたいのです。Calisto の召使たちが、詳しくそれを行ったことで十分だと思いますのでね。ですから、その文体の点をどうお考えか、私たちにお話し下さい。

V. その文体は、事実、登場人物にぴったりと合っています。だが、二つの難点があることは否定しえませんが、これは容易に改められるものなので、この点の改訂を行なう人が出てきたとしたら、その人は作品そのものの価値を大きく高めたことにもなりましょうね。その難点のひとつは、Magnificat a maitines^⑤ のような、実に突飛な単語を、次々と重ねて使っている場面が何度かみられること、もうひとつは、今日のカスティリア語では分からないようなラテン語臭い単語を、本来のカスティリア語の単語があってそれを使えばいいところにまで使っていること、なのです。

「Celestina」でこの二点を訂正すれば、私の思うところ、カスティリア語で書かれた本で、これほどにことばづかいが自然で、適切で、上品なものは他にない、といえるようになるでしょうね。

M. それではあなた様、なぜ、少しばかり時間をとって、そのお仕事をなさらないのですか。

V. 差し出たことになるといけませんからね。

M. 「*Questión de amor*」^⑥については、どのようにお考えですか。

V. 発想も実にいいし、その書にみられる技巧もとっても洗練されていますし、主題の取り扱い方も、あらゆる点からみていいと思いますよ。文体は、散文のところはもっとよくなると思いますが、今のままでも悪くはありませんね。韻文の箇所は、私の気に入りません。

M. 「*Cárcel del Amor*」^⑦についてはお考えは如何でしょうか。

V. 前のものよりも、こちらの文体の方が優れているようですね。しかしそういった小品はみな、必要な注意も気くばりもせず書いてあるので何らかの欠点があり、これがため、大した評価は与えられないのですよ。勿論のこと、ギリシア人著述家のなかでみなさん方が、デモステネス、クセノフォン、ソクラテス、プルタルコ、ルシアノやその他ギリシア語の大作家といえる人々を称めたあたり、ラテン語の作家では、キケロ、シーザー、サルスティオ、テレンティウスやその他、大きな注意を払ってものを書き残し、そこにこそラテン語の特性と純粋さが自然な形で現われているとされる大家を称めたりするのは、また訳がちがいますね。一方、カスティリア語の本はぞんざいに書かれているので、これがため、カスティリア語がラテン語より得た単語はほとんど全部が、大なり小なりくずれたり、使い方を誤まったりする結果となっています。こうなったのも、表現の方法を熱心に捜し求めたような識者の著述が、人の手から手へと、つまり口伝えにしか伝わらなかったもので、それらが少しずつ失われてゆき、ついには忘れ去られてしまったものも、今では沢山あるのです。皆さん方が読もうとしても、仲々見付けにくくて、いろんなところを捜し回ってやっと、というものもあれば、あなた方には前に見たことがあるように思えても、誰が持っているかが分からず、また内容も大きく変っているものもありますね。あなた方には妙だと思えるかもしれませんが、次のことはお話ししておきましょうか。いいですか、私の調べたところでは、カス

ティリア語がラテン語から取り入れた単語を、完全にきっちりと書き発音するとしたら、今仮りにカスティリア語で書いてあるどんな本を読んでも、それが分からないようなラテン人はおそらくはいないだろうし、またラテン語で書かれているどんな本でも、そのおおよその意味の分からないカスティリア人もおそらくはいないだろう、ということなのです。とはいっても、単語のくずれ方は激しくまた大きいので、この理由だけで、私が今ここでいったことに反対し、トスカナ語の方が、カスティリア語よりもラテン語に近い、と主張し譲らない人もいるにはいますけれどもね。

M. 有難いことに、あなた様、この問題に深く立ち入られるようなご様子ではなかったのに、ご自分からその問題に入り込んでしまわれましたね。と申しますのは、この点あなた様のお考えを伺ってみたかったのですが、あなた様ここには立ち入りたくない、とおっしゃるのではないかと危惧しておりましたね。しかし、話をお始めになったのですから、この点であなた様のお感じのことを、私たちにお話し下さるようお願いいたします。ただ、あなた様がカスティリア語に対し抱いておいでの愛着心や、ここがイタリアだということで、イタリア人にも愛想をしないといけない、なんていう気持ちに引きずられて、手心を加えられると困りますが.....。

V. どちらの点でも安心してくれて結構ですよ。というのは、カスティリア語への愛着が強くて、私の理性の働きが鈍ったというほど、私はカスティリア語に夢中になったこともないし、また私の基本的な信条に逆らってまで、人にお愛想をする積りもありませんのでね。私は尋ねられたことに対し、感じたままを、率直にいうことにしていますから。

M. 前置きはそこまでとして、お話始めていただきたいですね、あなた様のお説を伺えば、それで先程のおことばをも信用させていただける、ということにもなりますので。

V. それこそ私の望むところです。まず初めに、ラテン語、トスカナ語とカスティリア語の三言語を観察してみて、トスカナ語はカスティリア語よりも沢山に、完全な形でのラテン語の単語を留めていること、カスティリア語ではトスカナ語よりも、ラテン語の単語のくずれ方が激しい、ということが分かりました。この完全な形でラテン語の単語を留めているという私の考え、皆さん方のことば、トスカナ語の利点として認めてもらえるはずですよ。

M. 私はお考えに賛成ですが、それはトスカナ語の利点だからそういうのではなく、事実そうなのですよ。

V. お説の通りといたしましょうか。後に述べた事柄の確認ですが、これも私からそれを証明しないことには、皆さん方にそうだと認めてもらえないことが分かっているので、証明として次のこと、つまり、私の手許に何か一冊カスティリア語の本があって、そこにある語彙を調べたら、その大部分は、ラテン語そのものか、それともそれがくずれて出来たものか、のいずれかになること、加えて、ラテン語系でない単語が使っているような箇所にはラテン語系のものを入れ換えられる、ということをいっておきたいですね。但し、先にもいったことですが、どうしても他のもので代用しえない単語も、一部はあって、これは、副詞、接続詞、冠詞の、ようなごく僅かな場合です。

M. こうなのだ、とおっしゃるだけでは十分とは申せませんね。事実こうだ、と例をお示しいただけませんか。

V. 喜んでそういたしましょう。すでに確認もしたことですが、カスティリア語のなかで最も純粹なところは、諺に現われていますので、諺を使っているこの点をお話ししましょう。“Esse es rey, el que no vee rey”^⑧という諺がありますが、これはラテン語では一語、一語を置き換えて、“Ipse est rex qui non videt regem”というでしょうね。“Malo verná que bueno me hará”^⑨は、同じくラテン語では、“Malus veniet qui bonum me faciet”といいいましょう。“Oy por mí y cras por ti”^⑩はラテン語では“Hodie pro me et cras pro te”です。また“Malo es errar y peor es perseverar”^⑪は、ラテン語では、“Malum est errare et peius perseverare”といっています。このように、私の考えるところ、ラテン語は台所のような役割ですが、ラテン語にしても、十分にその意味が分かりますね。どうですか皆さん方には。

M. ほとんど同じですね。

V. ですからこの類のものであれば、三百点ぐらいは、出そうと思えば出せますですよ。しかし、あなた方にこの問題で十分にご満足いただくためには、ラテン語の詩句を何行か取出してくれたら、私の方でそれを大体全部、一語一語カスティリア語でおきかえてみせますが、どうですか。

M. ホラティウスの「詩論」の冒頭の箇所にしましょう。

V. 分かりました。

**Humano capiti cervicem pictor equinam / iungere si velit et varias
inducere plumas.**

(人間の頭に、もしある画家が、雌馬の首筋を繋ぎ合わせ、そこに何本かの羽根を付けたいと思うとしたら)

M. それで十分ですが。

V. では、これを遂語的にカスティリア語にしたものを聴いて下さい。

“Humana cabeza cerviz pintor de yegua ayuntar si querrá y varias poner plumas” となります。

C. 私にはそれは、何とも理解のしようのない迷文句ですが。

V. 正しくそうです。というのは、一語一語置き換えただけですからね、しかし、夫々の単語をきっちりと配置すれば、その意味もはっきり分かるでしょうね。

C. では正しく並び変えて下さいませんか。

V. **“Si a una cabeza humana querrá un pintor ayuntar una cerviz de yegua y ponerle varias plumas, ...”**^⑫ となりますね、こうするとどうですか。

C. ええ、よく分かります。

V. さてここの2行の詩文では、**querrá** 以外には、皆さん方が、ラテン語に近いものとして認知し難い単語はないのじゃないかとも思いますが、この点どうですか。

M. 正しくその通りです。これこそお説を立派に証明するものになりますし、またこのお話やその他のことを通じて、ラテン語がくずれて出来た語彙のお話が、正しいということが分かりました。

V. さてと、みなさん方がこの点を十分に詳しく知ったとしたら、私の考えが正しいことに、今以上にはっきりと気が付くことは間違いありませんね。というのは、知識が深まれば、そうとは考え及ばなかったものでも、これはラテン語源だ、といえる語彙を見付け出せるようになりましょうからね。もしよかったら、この種のをいくつかお話ししましょうか。

M. もしよかったらどころか、お話し下されば有難いですね。

V. **Ogaño** は、これがラテン語からのものであると考えた人がありますかな。

M. 誰一人そうは考えませんね。

V. そうでしょうね。ですが *g* を *c* に変え、それが失ってしまった帯気音を加えると、*hoc anno*^⑬ となりますが、これは *ogaño* と同じ意味になるのですよ。同じことが *agora* にもみられます。まず、*g* を *c* に変え、*a* と *o* に夫々帯気音を加えると、*hac hora*^⑭ になりますが、これは *agora* と同じ意味ですね。

M. なるほどごもっともなお話ですね。

V. 同じようにすれば、あなた方も、そんな風に仮面をかぶっているのです、ラテン語とカスティリア語に関心を持っている人の目にしかとまらない他の沢山の単語をも捜し出せることでしょうね。他に仮面をかぶっているのではなく、姿を変えているだけなので、もっと捜し出しやすいのもあるのですよ。例えば *agua* は *aqua*, *leño* は *lignum*, *tabla* は *tabula*, *lecho* は *lectus* に呼応しますし、動詞では、*hazer* は *facere*, *traer* は *trahere*, *pedir* は *petere* に呼応するなど、数え出せばきりがありませんね。これ以外に、私たちが字母だけではなく、意味までも変化させてしまった単語もあるのです。たとえば *fabula* から *habla* を作り、ここから *hablar* が生れています。*indurare* から *endurar* を作りましたが、これは“僅かなものを大切にする”の意味を表わしますが、この意味は“*Ni al gastador que gastar ni al endurador que endurar*”^⑮ という諺に出てきますね。また、*finis* から出たものとして、“死んだ”の意味で *finado* といっていますし、*forum* から *fuero* を作り出しています。とくにこの *fuero* は、“*No por el huevo, sino por el fuero*”^⑯ という諺に出てくるような使い方をしています。また、*mora* から *morar* を作り出しましたが、これは *habitar* の意味で、“*Quien cabo mal vezino mora, horas canta y horas llora*”^⑰ という諺の中に現われています。同じく、*tangere* から *tañer* を作りましたが、これは、“*Quien las sabe, las tañe*”^⑱ に出てきます。私たちはまた、ラテン語が使っているのとは正反対の意味で *civil* を使っていますが、これは、“*Caséme con la cevil por el florín*”^⑲ に出てくるのです。ここでは *cevil* は“卑しく低俗な”という意味なのです。同じような使い方を一部の人が *regular* という単語についても行なっていますね。これはあなた方も知っているように、ラテン語では *gloria* (栄光) の意味で使われるのですが、カスティリア語では *vituperio* (侮辱) の意味で使う人があるのです。しかし、どちらの意味にせよ、私の意図するところは、

これらの単語全部がはっきりとラテン語であると認識されれば、それで十分なのです。さてと、今もし仮にトスカナ語について、私がカスティリア語にしたのと同じ二種の調査ができ、また私が皆さん方にみせた語彙のくずれについても何かがいえるとしたら、その結論はどうなるでしょうか、私よりもトスカナ語に詳しい皆さん方にこの点はお任せしておきますよ。まあ、私のみるところ、あなたはそんなことを考えてみようなんて思わないでしょうが.....。

M. 私など、そんな気さらさらありませんね。

C. 私も駄目ですね。ただし、その問題を本気になって考えてみたら、何かちょっとした説ぐらいは出せるんじゃないか、とも思いますかね。

V. それでは、今日から八日の間あなた方にこの点を考えておいてもらい、そうして再びここに集まり、この論争に結論を下したらどうでしょうか。今はもうナポリに帰る時刻になりました。さあ、私たちに馬を出してくれるよう、いってくださいませんか、これからが帰り道ですからね。しかし、この食事、私には本当にしんどいひと時でしたね。いわば“痛み”付きのパンをいただいたような気分ですよ。

M. そんなことをおっしゃるのはどうも承服できません、というのは今まで私たちが話したことごとは、あなた様には下らないことであっても、私たちには大層有益であったからです。まだ、それに加えて、もしあなた様のご立腹をかうようなことがないとの確信があれば、何のためらいもなく、ここでのお話の一部始終を記録してゆく写字生を一人連れてきていたのに、本当に残念だということをも申し上げておきたいですね。というのは、私は自分の記憶に自信など持てず、お話を全部覚えてしまうなんておぼつかないものですから。

V. 写字生の件は、そうしなかったので損をするのはあなた方ですね。私は何も悪いことをしていませんよ。

M. いやいやあなた様にも責任があるのですよ、しかも大きな責任が、というのは、一番最初あなた様、いろいろもったいを付けられて、こんな話をするのは場違いだとでもお考えになったのか、私がお願いしていることを仲々お聞き届けいただかなかったのですからね。

V. それはまったくの曲解というものです。なぜ、この話が場違いだなどと考えなくてはいけないのでしょうか。

M. ですが、私はあなた様が実に細かい神経をされているとお見受けしますね、お顔の前を蠅が飛ぶ度毎に、それがお気に召す場合は別ですが、それ以外はご立腹の連続ですからね。

V. その点はあなたの言、当たっています。というのも、私は物事が私の思う通りにならなければ気のすまない性でして、私が好意を抱いている人が私の思うようにしたり、いったりしてくれないと無性に腹が立つのです。また、私は無遠慮な人間なもので、私の考えをすぐに、ずけずけと人にいってしまうのでして……このような欠点がありますので、私の友人にはこのところは斟酌してもらわないとね。

M. 欠点だとお気付きなら、それを直される方がいいのではありませんでしょうか。

V. それはそうです。しかし、あなた、「習慣を変えるのは命と引き換えに」^{②①}という諺を知りませんか。

M. ええ、よく知っています。ですが人間は一人一人が違うのですよ。あなた自身が欠点とお考えのことを、あなたの友人には辛抱し我慢させ、黙認させておいて、その友人の方では欠点とも思っていないことをあなた様の方で我慢できない、けしからん、とおっしゃるのは勝手すぎるように思いますね。

V. 人と人との間には差があるはずだ、という考え、私もまったくその通りだと思います。しかしその他の点はあなたは誤解をしていますね。というのは、私の欠点が他の人のものよりもまだ我慢できるというのは、私が、それが何かを十分に心得ているからで、こうなればこそ、いつかは私自身で矯正もできると期待しうるのです。これとは逆に、自分のとは違い他人の欠点の方は、その内容も分からず、修正もきかないものです。だから、なお我慢しづらいということになるのですよ。したがって、友人たちの言動をみて、私にこれはまずいなと思えることがあるのに、それを友人たちに注意しないとすれば、私は友人としての役割を放棄したことにもなる訳ですよ。しかし、こんなことはどうでもいいのです。さあ行きましょう、遅くなりましたから。

M. 少々お待ち下さいませんか、まだ皮をはいでいない尻尾が残っていますのでね^{②②}。

V. それはどういうことですか。

M. 私たち今まであなた様に隠し事をいたしておりました。ご立腹なさるのではないかと思うようなことをいたしました。何卒悪くお取りにならないようお願いいたします。

V. 何事ですか。

M. 今お目に掛けます。アウレリオ、書いたものをここに持ってきて下さい。これをごらん下さい、あなた様がお話しになったこと全部、ここに書き留めてあるのです。私はこのようなことのために写字生をおいていますが、彼はその書き取った内容に十分詳しい知識を持つ者でありまして……。

V. 神のご配慮として、私はそれを認めることにいたしましょう。ですが、あなた方だけの内輪のものにして、決して人の手から手へと渡ることのないようにして下さいよ。不都合が生じますのでね。

M. 私は不都合などはおろか、役に立つと思いますので、それを見たいという人皆に見せ、加えて都合がつけば、印刷に出そうとも思うのですが。

V. そんな大それたことは駄目ですよ。間違ってもそんな心得違いはしないで下さいよ。

P. 遠回しの話をするのは止めましょうよ。この際大切なことを、バルデス氏にはっきりといった方がいいのではありませんか。私はバルデス氏とは懇意にしていまして、彼は、友人たちがこうしてほしいとはっきりと頼めば、それを快く引き受けてくれる人だ、ということをも知っています。ですからバルデス様、私たちがお願いしたいのは、ここで私たちが話したとの記録全部を読んで、これを整理し、また正しいカスティリア語の文体にしていだきたい、ということなのです。ここにいる人たちはイタリア語でしゃべったのですが、この人たちも自分がカスティリア語でしゃべっているように、変えてもらっていい、と申しておりますのでね。

M. いやいやむしろ、声を大にしてそのことをバルデス氏にお願いしたいですね。バルデス先生、もしよろしければ、今朝の話をもとに前半部分を作り、午後のを後半とし全体で一冊としたら如何でしょうか。

V. あなた方はこれを食後のデザート of 果物の代りに、私にとっておいてくれたという訳ですね。さあ、もう帰ってくださいよ。

M. 私たちはここから動きませんし、あなた様をお帰し致しませんよ、この今お願いしていることを承知した、とお約束いただかない限りは……。

P. お願いいたします、そんなにもったいぶった堅いことをおっしゃらずともいいのではありませんか。といいますのは、あなた様のお仕事は、まずはこの種の研究に励まれることでしょうし、また、あなた様が立派なお仕事をしようと思われたら、簡単だと思います。ですから、あなた様ご自身と私ども、私たちの居たこの場所の名を高める意味でも、ひとつこの話をご承諾いただきたいのです。

V. このことは、あなた方も分かるように、仲々慎重を要することです。少しばかり考えさせてくれませんか、それでそうしていいというように思い、これを公にしてもいいと判断できたら、そうすると皆さん方に約束しましょう。

M. そのおことばで私たちは結構ですし、私は、この三人を代表してそのお約束を頂戴し、今日から八日目にあなた様をご招待し、コリオラノ君には勉強してきてもらって、トスカナ語とラテン語との間の似通いについて、分かったことをお話しいただきましょうか。ひとつ、皆さんにお願いをしたいのですが、誰に当っても、それはお断りだ、なんていわないと私にお約束下さいますか。

V. 私の方はお約束いたしますよ、どう考えてもこれ以上の難題は出てこないでしょうからね^②。

P. 私もまた約束しますよ。

C. 私は、あなたのお考えに全面的に従います。

M. 私のお願いとは何かを申しますと、パチェコさんには、かねがね作りたいと思ってきたといっておられる、スペイン語の諺集の編纂に取り組むと私たちに約束してほしい、ということなのです。

P. 逆らう積りなどは毛頭なく、喜んで約束いたします。しかし、必要な時間と準備のできたときのことにして下さいね^③。

V. そんなことをいっていたら永久にできませんよ。しかし、まあ、好きなときに書いてもらうのですね、私には関係のないことです。だが、今私が、一番大切だと思うのはこのこと、つまり、「おい、私に馬をくれ。早く行ける者は道を行け、私は前に出る者の邪魔もしなければ、後に居残る者を待ちもしないから」^④、ということなのです。

[終 り]

諺及び成句一覧表

[Juan de Valdés は持論の証明、論述の拠り所として常に諺を用いた。彼は対話者の一人で、イスパニア人の Pacheco の口を借りて、「諺の中にはカスティリア語の純粋な姿がはっきりと現われている」(テキスト, 15ページ)といている。また、この訳出の底本とした Clásicos Castellanos 叢書のテキストの末尾にも、Indice de refranes y frases (諺及び成句索引)が挙げられているので、以下に、この国語問答に取り上げられた諺、成句をまとめ、再度、簡単に解説を加えたいと思う(配列はA, B, C順で、末尾の数字はテキストの当該ページを示す)。これらの諺、格言、成句については、これまでの7回の分訳の場で、夫々、註記として解説、解釈を行ってきたが、読み返してみると、多くの間違いや不十分な箇所があり、これらを是非訂正しておきたいとも考え、重複する場合もあるが、ここで「諺及び成句一覧表」を付加した。したがって、この一覧表は、過去7回の註記中の間違いの訂正と、不十分な部分の修正という意味をももつ。]

1) A buen callar llaman Sancho. (53) (正しき沈黙を人はサンチョと呼ぶ)とは、しゃべる時にはよく考えて控え目にせよ、と教えたもの。

2) A carne de lobo, salsa de perro, (53). 「狼の肉には、犬のソースを」とは、ある人と親しく付き合っていると、その内に、その人に対し愛情、友情などを感じるようになる、と教えたもの。

3) ¿Adónde irá el buey que no are? (54), 「田を鋤かぬ牛はどこに行くだろうか」とは、仕事に苦労はつきもの、辛抱が肝心だ、と教えたもの。

4) Adonde no está su dueño, allí está su duelo. (109). 「彼の主人のいないところには、彼の嘆きがある」とは、召使などは、その主人次第でいろいろな経験をする、と教えたもの。

5) Adonde quiera que vayas, de los tuyos ayas. (105,125). 「どこに行っても、お前が仲間を持たんことを」とは、親しくなれる人、気の合う人はどこにでもいるものだ、と教えたものか。

6) A escasso señor, artero servidor. (106). 「貧しき主人には、ずるい召使い」とは、家貧しくして孝子出るように、貧乏な主人には、目ざ

とく機転の利く奉公人が居るものだ、との意。

7) *A escudero pobre, moço adivino. (135).* 「貧しい郷士には、目ざとい下僕を」とは、人を使う立場にある人は、あまり下の者を手荒く使うな、と教えたもの。

8) *A fuerza de villano, hierro en medio. (80).* 「無法者の力には、間に刀を」とは、道理の通じぬ者には、力で対抗するしかない、と教えたもの。

9) *Agua vertida, no toda cogida. (123).* 「こぼれた水は、全部はすくえない」とは、軽卒な行動のため生じた損失などは、完全には償いきれない、と教えたもの。

10) *Al buey maldito el pelo le luce. (102).* 「呪われた牛に、髪の毛が輝く」とは、憎まれ者ますます世にはびこる、の意。

11) *Al buey viejo no le cates abrigo, (108).* 「年老いた牛のために外套を捜すな」とは、年長者、経験者に忠告などすることの愚かさ、を教えたもの。

12) *Al moço malo, ponedle la mesa y embiadlo al mandado. (51, 135).* 「性の悪い召使には、まず飯を食わせてから使いに出せ」とは、褒美をうまく活用して人を使え、と教えたもの。

13) *Al mur que no sabe sino un agujero, presto lo toma el gato. (150).* 「ひとつの穴しか知らないねずみは、すぐに猫に捕えられる」とは、敵はどこから現われるか分からないので、事に臨んでは逃げ道をいくつか準備しておくべし、と教えたもの。

14) *A los años mil, torna el agua a su cuvil, (107).* 「千年たてば、水はその川床に帰る」とは、一度、値打や力がなくなったと思えるものでも、長年の後にはまた値打が出たり、力を吹き返したりすることがある、と教えたもの。

15) *Al raposo durmiente no le amanece la gallina en el vientre. (109).* 「眠れる狐には、その腹の中で鶏が朝を告げることはない」とは、怠け者を戒めたもの。

16) *Al ruin, dadle un palmo y tomaráse quatro. (40).* 「お前たち、卑しい奴に1パルモやれば、4パルモも取るだろう」とは、好意を受けたり、情けをかけてもらったことに感謝もせず、まだそのうえに、新たな要

求などをしてくる輩を警戒せよ、の意。

17) Al ruin, quando lo mientan luego viene. (44, 117). 「卑しい奴のことをいうと、すぐにそいつが現われる」とは、日本語の噂をすれば影のこと。

18) Allá van leyes do quieren reyes. (125). 「法律は行く、王様の望むところに」とは、無理が通れば、道理がひっこむの意。

19) Allegadora de la ceniza y derramadora de la harina. (46). 「灰をかき集めてためるくせに、粉をばらまく女」とは、僅かなところでけちけちして、別のことで浪費をする女性の性癖を皮肉ったもの。

20) Allégate a los buenos y serás uno de ellos. (54). 「善き人々に近ずけ、すればお前もその一人になるだろう」とは、友を選ぶことの大切さを教えたもの。

21) Ama a quien no te ama, y responde a quien no te llama. (160). 「お前を愛さぬ者を愛し、お前に呼びかけぬ者に答えよ」とは、無駄なことは止めよ、お人好しは程々に、と教えたもの。

22) Amigos y mulas fallecen a las duras. (111). 「友とらばとは困ったときに不足する」とは、必要なときの友達、援助は仲々得られない、と教えたもの。

23) Andar a sombra de tejados. (118). 成句で、「人目を避けている、逃げ隠れしている」の意。

24) Ande yo caliente y ríase la gente. (78). 「私は暖かくして行こう、人よ笑いたければ笑え」とは、服を着こんで、着ぶくれしたときに、その本人がいうことば。

25) A pan de quince días, hambre de tres semanas. (84). 「2週間のパンに、3週間の飢」とは、むづかしい仕事のうちでも、特に難局と目される段階を乗り切るためには、ひたすら努力、根気あるのみ、と教えた諺。

26) A perro viejo no cuzcuz. (53). 「老犬には“おいで、おいで”なんていうな」とは、経験豊かな人、思慮深い人を欺そうとしても駄目だ、と教えた諺。

27) A quien de mucho mal es ducho, poco bien se le haze mucho. (109). 「多くの不幸を経た者には、僅かの幸せも大きくみえる」とは、本

当の幸せは、いろいろな不幸を経験して始めて感じとれる、と教えたもの。

28) *A río buelto, ganancia de pescadores.* (107). 「渦巻く川には、漁師のもうけ」とは、火事場泥棒的なことをして、自分の利益を求めようとする行為を皮肉ったもの。

29) *Arregostóse la vieja a los bredos y ni dexó verdes ni secos.* (106). 「老婆がありた草を好きになったが、それを緑に保つことも、干からびさせることもなかった」とは、あまりものに凝って、それに入れあげることの不都合を教えたもの。

30) *A un traidor, dos alevosos.* (106). 「一人の裏切者には、二人の背信者」とは、背信行為を行なう者は皆から信用されない、と教えたもの。

31) *Ayúdate y anydaráte Dios.* (51). 「汝みずからを助けよ、すれば神の助けが得られるであろう」とは、自助、自立の大切さを教えたもの。

32) *Barva a barva, vergüenza se cata.* (108). 「面と向き合っていれば、恥ずかしさが感知される」とは、目前にいる人に対しては、どうしても配慮、敬意などを払わざるをえないと考えるのが人の常だ、と教えたもの。

33) *Bien aya quien a los suyos se parece.* (105). 「自分の身内に似たる者に幸あらんことを」とは、不行跡などをしでかして家族の者たちに迷惑をかけてはいけない、と教えたもの。

34) *Bolsa sin dinero, dígole cuero.* (70). 「金が入っていない財布、それを私は皮と呼ぶ」とは、本来の使用目的に役立たぬものには、何の値打もない、と教えたもの。

35) *Bueno es missar y casa guardar.* (116). 「ミサに参って、家をしっかりと守るのはいいことだ」とは、神に祈るだけでなく、家族を大切に、日常の諸事にも努力せよ、と教えたもの。

36) *Cabeza loca no sufre toca.* (129). 「狂った頭はじっと頭布をかぶってられない」とは、かぶり物をしなければならないのに、これを欠いている人を揶揄するのに用いたり、浅慮な者は、決まりとか順序立った考えに立っては行動できないこと、などを表わしたりするもの。 の。

37) *Cada gallo cante en su muladar.* (71). 「鶏は夫々がそのごみ捨て場で鳴け」とは、己の力倆、分際を弁えることの大切さを教えた諺。

38) *Candil sin mecha, ¿ qué aprovecha ?* (116). 「灯心のない油灯は何の役に立つか」とは、中途半端なものは何の用もなさぬ、と教えた諺。

39) *Cargado de hierro, cargado de miedo.* (80). 「武器を背負って、恐れを背負う」とは、仰々しく武装し、勇ましい様子をしている者こそ、臆病者だ、と教えた諺。

40) *Casa hospedada, comida y denostada.* (150). 「泊られ、食べられ、それに侮辱された家」とは、忘恩の徒を戒めるもの。

41) *Caséme con la cevil por el florín.* (189). 「私は金のために、下賤な女と結婚した」とは、人の気持、愛情などを金で買おうとしても駄目だ、と教えたもの。

42) *Castígame mi madre y yo trómposelas.* (122). 「私の母は私をこらしめ、私は彼女を欺むこう」とは、いくら忠告、諫言してやっても、相手が強情を張って聞かなければ無駄だ、との意味。なお、この諺の解釈には諸説ありとされている。

43) *Cierra tu puerta y loa tus vezinos.* (116). 「お前の家の扉を閉め、それから隣人を称めよ」とは、壁に耳あり、人のことを話すには多大の注意が必要、と教えたもの。

44) *Como por viña vendimiada.* (103). 「取り入れの済んだブドウ園に行くように」とは、成句で、容易に、何の障害、支障もなく、の意味。

45) *Con lo que Pedro sana, Sancho adolece.* (149). 「ペドロが治ったもので、サンチョが病気ににかかる」とは、一方を立てようとすると、もう一方が立たないことがある、と教えた諺。

46) *Con lo que sana el hígado, enferma la bolsa.* (148). 「肝臓は治っても、懐は痛む」とは、大切なものは、努力をし金をかけねば得られない、と教えたもの。

47) *Con mal anda el huso, cuando la barva no anda de suso.* (122). 「糸巻きは、鬚が上から動かぬ時には、間違っただく」とは、男のいないところでは、きれいな女性といえ、何の値打もない、といったもの。

48) *Cría cuervo y sacaráte el ojo.* (151). 「烏を育てよ、そうすればお前の目玉をくり抜いてくれるだろう」とは、恩知らずな者、道理の通じぬ者にはいくら尽くしてやっても、逆恨みされることが多々あるので用心せよ、と教えた諺。

49) *Da Dios habas a quien no tiene quixadas.* (80). 「神は、あごの骨を持たぬ者にそら豆を与えられる」とは、大金などは、皮肉なことにそれを活用する術を知らぬ者の手に入りやすい、といったもの。

50) *Dado de ruín, a su dueño parece.* (109). 「下賤な者のさいころは当の持主に似る」とは、人の行ない、行動には、人夫々の性格が出るものだ、との意。

51) *De cada canto, tres leguas de mal quebranto.* (149). 「どんな場所からでも、歩くに困難な三レグアがある」とは、何事をなすにも困難が付きものだとか、人それぞれに悩み、苦しみがあるとかを教えた諺。

51) *Del lobo un pelo, y ése de la frente.* (38, 45). 「狼からは一本の毛でも、ひたいのあの毛でも抜いてやれ」とは、強欲な者からは取れるものは何んであれ、遠慮せずに取りっておけ、と教えた諺。

52) *Del monte salte quien el monte quema.* (45, 161). 「山からは、その山に火をつける者が出てくる」とは、我々は、近しい者、親しい者からいろいろな被害や迷惑をこうむりやすい、と教えたもの。

53) *De lo contado come el lobo.* (39). 「ほんの僅かなものをも狼は食ってしまう」とは、どんなに注意をしても、物を安全に隠しおおすことなど不可能だ、と教えた諺。

54) *De los escarmentados se levantan los arteros.* (57, 106). 「懲りた者の中から熟達した者が立ち上がる」とは、どんな苦労も、それは将来二度と同じ轍を踏まぬための計り知れない教訓となるものだ、と教えた諺。

55) *De luengas vías, luengas mentiras.* (115). 「長い道のりには、長々とした嘘 (がある)」とは、昔のこと、遠く離れたところのことになると嘘やほらが出やすい、との意味。

56) *De Parla van a Puñonrostro.* (126). 「パルラから人々はプニョンロストロへ行く」とは、ほんの些細な言葉づかいがもとで喧嘩になることもあるので、言葉づかいには注意せよ、と教えたもの。

57) *De servidores leales se hinchen los hospitales.* (112). 「忠実な下僕たちで病院がふくれあがる」とは、人に使われる者たちの怠け癖を皮肉ったもの。

58) *Decir y hacer comen a mi mesa.* (142). 「言うこと為すこととが

私の食卓で食事をする」とは、言行一致させることのむづかしさを教えたもの。

59) *Dixo el asno al mulo : harre allá, orejudo. (39).* 「ロバがラバに向かって、“ハイシ、ドゥドゥ、耳の長いの” といった」とは、己の欠点を棚に上げて、他人の欠点、誤ちを責めることの愚かさを諷めたもの。

60) *Dixo la leche al vino : “bien seáis venido, amigo” (158).* 「牛乳がブドー酒に向かって、“よく来てくれたね、友達よ” といった」とは、牛乳、ブドー酒も単独では優れた食物だが、一緒に飲むとお腹をこわすことが多い。このように、いいとされる物でもむやみに混ぜ合わしたりすると、思わぬ害を招くことになるぞ、と教えたもの。

61) *Dixo la sartén a la caldera : tira allá, culnegra. (39).* 「フライ鍋が釜に向かって、“そこをのけ、尻の黒いの” といった」。意味は(59)と同じ。

62) *Donde fuerza viene, derecho se pierde. (17).* 「力の来るところ権利が失なわれる」とは、無理通って、道理ひっこむ、に当たる。

63) *Donde las dan, allí las toman. (77).* 「人を叩いたら、その場所で叩きかえされる」とは、因果応報の意味。

64) *Dos a dos y tres al mohino. (149).* 「二人が二人、三人となって弱い人に当たる」とは、何人かがしめし合わせて、弱い者いじめをすることをいう。

65) *Duelo ajeno de pelo cuelga. (110).* 「他人の嘆きなんて、髪の毛からぶら下っているようなもの」とは、本当の悲しみ、辛さは、当事者にしか分からない、と教えたもの。

66) *Dure lo que durare, como cuchara de pan. (47, 70).* 「パンで作ったさじのように、続く限り続け」とは、いつ何時なくなるかもしれないようなものは、この今しっかりと確保しておけ、と教えたもの。

67) *Duro es el alcacer para çampoñas. (82).* 「麦は麦笛を作るには堅い」とは、人が新たに習い事などを始めるには年をとりすぎている、という意味を表わす慣用的表現。

68) *El abad de donde canta de allí yanta. (43, 54, 115).* 「僧院長はミサをあげて、そのあがりで食べるもの」とは、人みな自分の稼ぎで、生計を立ててゆくべきだ、と教えたもの。

69) *El ansar de Cantimpalo, que salió al lobo al camino. (146).* 「カ

ンティンパロの鴨は、道に、狼の前に出てゆく」とは、その必要もないのに危険に身をさらす人を皮肉っているための表現。

70) *El can congosto a su amo buelve el rostro.* (150). 「腹を立てた犬は、その主人にも顔を向ける」とは、腹を立てているときには、人は可愛がっている者にさえ、ひどい態度、仕打をすることがある、と教えたもの。

71) *El mal del milano, el ala quebrada y el papo sano.* (45). 「とびの病とは、羽根が破れてはいるが、餌袋は丈夫そのもの」とは、体の不調を訴えながら大飯を食う者、憶病なくせに空威張りばかりする者を皮肉っているための表現。

72) *El mal vezino, vee lo que entra y no lo que sale.* (81). 「悪しき隣人は、入るものは見るが、出るものは見ない」とは、とかく世間というものは、他人が幸せや財力を得たのをみては羨ましく思い、あれこれいうものだが、これとは逆に、運悪くお金が出ていくような事態に陥っても、まったく無関心そのものだ、と教えた諺。

73) *El polvo de la oveja, alcohol es para el lobo.* (44). 「羊のほこりは、狼にはアルコール」とは、人はこの世では、自分で考えるほどには、他人に迷惑や難儀を掛けていないものだ、と教えた諺。

74) *El que malas mañas ha, tarde o nunca las perderá.* (93) 「悪い癖を持つ人は、それを仲々失わないだろう」とは、悪習がつくと、これから脱れるのはむづかしいことを教えた諺。

75) *El socorro de Escalona [quando llega el agua la villa es quemada].* (156). 「エスカロナへの援軍 [水が届いたときには、その町は焼けてしまっている]」とは、時宜を得ない、事の済んでからの援助なんて何の意味もないことを教えた諺。

76) *En achaque de trama, stá acá nuestra ama.* (69). 「糸を取りに来たことにかこつけて、ここに我が家の女主人がいる」とは、あることをすると見せかけて、まったく別のことをしようと見論んでいる人を皮肉っているための表現。

77) *En ál va el engaño.* (105). 「別のことの中に偽がある」とは、物事を表面だけで判断してはいけない、と教えたもの。

78) *En cas del bueno, el ruín tras el fuego.* (125). 「善人の家では、

いやしき者が火の後にいる」とは、善人、気持のやさしい人は、自分の家の中でさえ、恵まれぬ人に居心地のいい場所を与え、親切にするものだ、と教えた諺。

79) *En cas del hazino, más manda la mujer que el marido.* (125).

「貧しい者の家では、夫より妻が命令する」とは、話し相手の気持を害するようなことはいふな、と教えたもの。

80) *En salvo stá el que repica.* (57). 「鐘を打つ者は安全だ」とは自分に関係のないことなら、他人の窮状に対しても、ああしろ、こうしろと口出しができるものだ、と教えたもの。

81) *[Entrar] por una oreja y [sallir] por otra.* (98). 「片方の耳から[入って], もう片方から[抜け出てしまう]」とは、聞いても、すぐに忘れさってしまうことの比喩的表現。

82) *Entre col y col lechuga.* (148). 「キャベツとキャベツの間にはちしや菜を」とは、一本調子、単調にならずに、趣向を変えて物事を行なうことの比喩的表現。

83) *Esse es rey, el que no vee rey.* (186). 「王たるものの見えぬ人、その人が王である」とは、権力の座は人の正鵠な判断を失なわせることが多い、と教えたもの。

84) *Estas son mis misas.* (194). 「これが私のとなえるミサである」とは、自分が日頃行なっていることを、少々茶化しているための表現。

85) *Fue la negra al baño y truxo que contar todo el año.* (55). 「黒人女が風呂に行き、一年間の話を持ってきた」とは、始めてのもの、稀らしいものは、愚か者のお喋りの種になるとの意味。

86) *Fui a casa de mi vezina y denostéme; vine a mi casa, y conhortéme.* (150). 「近所の人家に行き、恥ずかしく思った。しかし、自分の家に帰ると、それも直った」とは、人は自分の持っているもので満足すべきである、と教えた諺。

87) *[Ganar] lo que suele un cosario con otro.* (7). 「馬喰がもう一人の馬喰から普通稼ぐものを[稼ぐ]」とは、同業者間では、助け合い融通し合うべきで、そこでの利益はたかが知れているの意味。

88) *Guárdate de mujer latina y de moça adivina.* (135). 「ラテン語を知る女と娘占師には用心して近付くな」とは、見識の高い女性、いわく

あり気な女性には十分に注意せよ、と教えた諺。

89) Haz bien y no cates a quien. (108). 「善を行ない、しかもその相手を見るな」とは、親切は人を見て行なうものではない、と教えたもの。

90) Haz lo que tu amo te manda y siéntate con él a la mesa. (54). 「お前の主人が命ずることをなし、彼と共に食卓に着け」とは、主人の言い付けを忠実に守る者は、その主人から絶大な信用を博するものだ、と教えた諺。

91) Haz mal y guarte. (125). 「悪をなし、そしてお前の身を守れ」とは、悪業は悪業をもって仕返しをされるので、身を慎しめ、と教えたものか。

92) Honra sin provecho, sortija en el dedo. (146). 「何の得にもならぬ名誉は、指に付けた指輪のようなもの」とは、利益を得るために名誉を求めるのではなく、真の名誉とは利益を離れたところにある、と教えたもの。

93) Oy por mí y cras por tí. (150, 186). 「今日は私に、明日はお前に」とは、今日は人の身、明日は我がの身。

94) Huésped que se combida, rece es de hartar. (121). 「自分を招待するお客は満足させ易い」とは、招かれもしないのにこのこ出掛けて来るような厚顔しい人には大した心遣いはいらぬ、と教えたもの。

95) ir por lana y volver trasquilado. (71, 88). 「羊毛を取りに行き、毛を刈られて帰ってくる」とは、みいら取りがみいらになる、に当たる。

96) La moça loca por la lista compra la toca. (129). 「狂人娘は、縞模様によって頭布を買う」とは、人や物を表面だけで判断するな、ひどい目に合うぞ、と教えたもの。

97) La mujer y la gallina por andar se pierde aína. (44). 「女性と鶏とは、出歩くとすぐに道に迷う」とは、女が家に居ないで外に出歩くと、思わぬ難儀や危険に出合うことが多いぞ、と警告したもの。

98) La pierna en el lecho y la mano en el pecho. (149). 「脚は寢床に、手は胸に」とは、損害回復、復旧のためには、それに相応しい手段をとるべきだ、と教えたもの。

99) Las letras no embotan la lança. (16). 「文字は鎗の穂先を鋭らせない」とは、文と武とは両立しうるものだ、と教えた諺。

100) Lo que as de dar al mur, dalo al gato. (50). 「お前がねずみに与えるべきもの、それを猫に与えよ」とは、無理を承知で、力づくででもやってのけねばならぬことを実行に移す場合には、呉々も慎重に行なうべし、と教えたもの。

101) Lo que da el nieto al abuelo. (46). 「孫が祖父にあげるもの」とは、ちょっとした親切、心遣いも年寄には嬉しいものだ、との意味か。

102) Malo es errar y peor es perseverar. (186). 「悪いのは間違ふこと、もっと悪いのは頑固に言い張ること」とは、過ちは素直に改めるべし、と教えたもの。

103) Malo es Pascual, mas nunca le falta mal. (133). 「悪いのはパスクアルで、彼には悪いことが絶えない」とは、悪事を働くような者は、次々と悪事を考え出すものだ、と教えたもの。

104) Malo verná que bueno me hará. (186). 「私を善人にするような悪人も来るだろう」とは、今はどんなに悪い人、悪いことに思えても、明日、明後日にはまた違って見えてくるものなので、悲観したり、即断したりすることはない、と教えたもの。

105) Más da el duro que el desnudo. (88). 「けちな者でも、裸の者よりは沢山与える」とは、どんなけちん坊からでも、一文なしと比べてみれば、まだお金などを引き出せる見込みがある、と教えた諺。

106) Más vale quedar por necio que ser tenido por porfiado. (27). 「強情な奴と思われるより馬鹿になっておく方がましだ」とは、強情に、しつこく自説に固執することの愚かさを戒めたもの。

107) Más ven quatro ojos que dos. (82). 「二個の眼よりも四個の眼の方がよく見える」とは、物事を最初から決め込んでしまわず、多くの人々の意見を聴いて考えてみる必要がある、と教えたもの。

108) Medio hermano, remiendo de mal paño. (81). 「異父母の兄弟は安物の布のつぎのようなもの」とは、自分の手、才覚で出来ることは、決して他人に任すな、と教えたもの。

109) Mientras descansas, maja esas granças. (117). 「お前が休んでいるうちに、その石炭を粉々にせよ」とは、自分一人が楽をし、他人に仕事を強いることの非道さを戒めたもの。

110) *Moça, guarda-te del moço quando le salle el boço.* (135). 「娘よ、青年にうすひげが出始めたら、用心して彼を避けよ」とは、男の子をいつまでも子供だとばかり思っているはいけない、特に、大人になり始めたら十分用心して接するように、という女性への警句。

111) *Muchos maestros cohonden la novia.* (108). 「多くの教師が許嫁をだめにする」とは、教師口調など、仕事のうえでの習慣は、他の生活の場面でも出やすくなるので、こういったことを心して慎め、と教えたもの。

112) *Mudar costumbre es a par de muerte.* (191). 「習慣を変えるのは、死と隣り合わせ」とは、長年慣れ親しんだことを止めて新たなことを始めるには、多大の努力、犠牲を払わねばならぬ、と教えたもの。

113) *Ni al gastador que gastar ni al endurador que endurar.* (189). 「浪費家には浪費すべきものを、節約家には節約すべきもの(を渡すな)」とは、お金などは、人それぞれの性格や考え方などに応じて、随分とその使い途がちがうので、人に金を預けたりするのは慎重に、と教えたものか。

114) *Ninguno no diga: dest' agua no beberé.* (69, 158). 「“この水は飲まない”と誰もいうな」とは、他人に起るのと同じことが、いつ何時自分に起るかもしれないので、口幅ったいことはいうな、と教えたもの。

115) *No haze Dios a quien desampara.* (100). 「神は他人を見捨てる人を造られない」とは、神の恵みを得んがためには、隣人をも助けよと教えたものか。

116) *No me pesa de mi hijo que enfermó, sino del vezo que tomó.* (123). 「私には、病気になった息子よりも、彼についた悪癖の方が心配だ」とは、悪い癖がつくと、これは病気より恐ろしいと、教えたもの。

117) *No pasa seguro quien corre por el muro.* (151). 「土塀の近くを走る者は、安全には通れない」とは、危険な場所を通ったり、危ない仕事をするときには、それ相当の覚悟がいる、と教えたもの。

118) *No por el huevo, sino por el fuero.* (189). 「ことは卵のためでなく、むしろ権利のため」とは、喧嘩や交渉事にあっては、体面とか筋論とかが優先し、実益が考慮されることは少ない、と教えたもの。

119) *No puede ser más negro el cuervo que sus alas.* (144). 「鳥はその羽根よりも黒くなりえない」とは、事態などがもうこれ以上に悪くなることはない、といった意味を表わす比喩的表現。

120) No se haría más en el monte de Toroços. (17). 「トロソスの山でもそれ以上のことはしないだろう」とは、要求されていることなどが無理難題だ、無茶だ、ということの意味するための表現。なお、 monte de Toroços は、かつては追剥の出没する場所として有名であったらしい。

121) O rico o pinjado, o muerto o descalabrado. (67). 「金持になるか宝石で身を飾るか、それとも逆に殺されるか、頭をかち割られるか」とは、“乾坤一擲、一か八かやってみるぞ”との、難事に臨んでの強い決心を表わすために用いる表現。

122) Palabras y plumas el viento las lleva. (11). 「言葉と羽根とは風が運んでゆく」とは、口でいったことは残らずに消えてしまうの意。

123) Pan y vino anda camino, que no moço garrido. (111). 「パンとぶどう酒とが道を歩くのだ、優男ではなしに」とは、いくら眉目秀麗であっても、それだけでは生活出来ない、と教えたもの。

124) Por la muestra podréis juzgar de la color del paño. (179). 「お前たちは、見本から布地の色を判断できよう」とは、今の様子から事態の結末を推定できることが多々ある、と教えたもの。

125) Por la víspera podéis sacar el disanto. (179). 「お前たちは、宵宮から本祭りを引き出せる」。意味するところは、124)と同じ。

126) Prendas de garçon dineros son. (111). 「若者の質草はお金だ」とは、若い人は、たとえ貧しくとも、能力、資質さえあれば、その将来に大きな期待がもてる、といったものか。

127) Qual la madre, tal la hija, y tal la manta que las cobija. (161). 「母が母なら娘も娘、その二人を覆う被り物もまた被り物」とは、この母にしてこの娘ありとあって、二人に共通するいやな面を強調する表現。

128) Quando uno no quiere, dos no barajan. (107). 「一人が望まなければ、二人は争わない」とは、喧嘩両成敗の意。

129) Quien a buen árbol se arrima, buena sombra lo cobija. (107). 「良き木に寄りかかる人を、良き陰が庇護する」とは、寄らば大樹の陰。

130) Quien a sí vence, a nadie teme. (117). 「己に勝つ者は、誰をも恐れない」とは、自己を圧え、己に克つことのむづかしさをいったもの。

131) Quien asnos ha perdido, cencerros se le antojan. (52). 「ろばをなくした者は、首の鈴だけでもろばに見える」とは、あるものを欲しい、

欲しいと思っている者には、ほんの些細な部分を入手しただけで、全部が手に入ったような錯覚に陥り易いので、この点十分心するよう教えた諺。

132) *Quien bien ama, bien desama.* (100). 「こよなく愛する人は、こよなく憎む」とは、人は、可愛いと思ったり、目を掛けたりしている者に対して、何とはなしに厳しく当たるものだ、と教えたものか。

133) *Quien bien ata, [bien] desata.* (101). 「うまくしばる者は、うまくほどく」とは、十分な準備をしてことを始める人は、成功疑いなしと教えたもの。

134) *Quien bien quiere a Beltrán, bien quiere a su can.* (150). 「ベルトゥランをこよなく愛する者は、その犬をも愛す」とは、ある人に対して抱く好意は、その人の縁者、関係者にまでも及んでゆくものだ、と教えた諺。

135) *Quien bien está, no se muda.* (57). 「居心地のいい者は、他所に移るな」とは、いろいろ山っ気を出すのはよくない、と教えたもの。

136) *Quien cabo mal vezino mora, horas canta y horas llora.* (189). 「悪しき隣人の近くに住む者は、何時間も歌いまた何時間も泣く」とは、住む場所を選ぶときは、その周りの様子を十分に調べよ、と教えたもの。

137) *Quien con su mayor burló, primero riyó y después lloró.* (47). 「その長上を馬鹿にした者は、最初は笑ったが、後で泣いた」とは、年長者、上司には適当な距離をおいて接するのがいい、と教えたものか。

138) *Quien da lo suyo antes de su muerte, merece que le den con un maco en la frente.* (26). 「自分の死ぬ前にその財産を与える者は、大槌で一発ひたいに喰らわせてもらうのがいい」とは、生存中に自分の地位、財産などを他人に譲渡することは、どんなに用意周到に行なっても、必らず後悔の種になる、と教えたもの。

139) *Quien espera, desespera.* (100). 「待つ人は絶望する」とは、何事にも限度があるので、甘えなども程々にしておけ、と教えたものか。

140) *Quien guarda y condesa, dos vezes pone mesa.* (160). 「ものを大切にしまい、節約する人は、二度食卓の用意をする」とは、日頃から節約を心掛ける人は、いざというときにも困らない、と教えたもの。

141) *Quien ha buen vezino, ha buen maitino.* (52). 「善き隣人を持つ者は、正しき勤行を持つ」とは、近所の人や周りの人には、平素から、愛

想よく、丁寧に接しておけ、と教えた諺。

142) *Quien haze un cesto, hará ciento.* (47). 「一つの籠を作る者は百をも作るだろう」とは、邪なことを何かやるような人間は、他に似たようなことを色々とするものだから、注意をせよ、と教えたもの。

143) *Quien las sabe las tañe.* (189). 「それを知っている人が、それを弾くべし」とは、何か能力のある人は、とかくそれを外に出したがるものだ、との意味。

144) *Quien lengua ha, a Roma va.* (53). 「舌を持つ人は、ローマに行く」とは、尋ね尋ねて行けば遠くまで行ける、の意味。

145) *Quien no arrisca, no aprisca.* (106). 「危険を冒さぬ者は、家畜を囲い場に入れられない」とは、虎穴に入らずんば虎児を得ず、に当たる。

146) *Quien no aventura, no gana.* (53,106). 「冒険せぬ者は、ものを得られない」。145) と同じ意味。

147) *Quien no come, no costriba.* (109). 「食べない者は、働けない」とは、食べ物が十分でないと仕事をする元気が出ない、の意味。

148) *Quien su enemigo popa, a sus manos muere.* (118). 「その敵をさげすむ者は、敵の手で死ぬ」とは、油断大敵、に当たる。

149) *Quien sufrió, calló y vido lo que quiso.* (47). 「耐え忍んだ者は沈黙しそして彼が望んだものを見た」とは、辛抱して待つことや、若い時の苦勞の大切さを教えたものか。

150) *Quien tiempo tiene y tiempo atiende, tiempo viene que se arrepiente.* (107). 「時間があるのに時間を待つ者には、後悔する時が来る」とは、一度あった機会を利用せずに、次の機会を待つなんてことはするな、と教えたもの。

151) *Quien yerra y s'enmienda, a Dios s'encomienda.* (80). 「誤ちを犯してもその身を改めたる者は、神にその身を任ねる」とは、誤ちを犯しても、本人がそれを悔い改めるのなら、その誤ち、過失などは責めるな、と教えたもの。

152) *Romero hito saca çatico.* (112). 「しつこく物乞いをする巡礼はパンの皮を引き出す」とは、あまり要求が執拗にすぎると、望むものは何も得られなくなってしまうことがある、と教えたもの。

153) *Sardina que gato lleva, galduda va.* (111). 「猫のとった鰯は、

行方不明だ」とは、ひとたび被害などを受けると、その修復が大変だ、の意。

154) Si ésta escapo y no muero, nunca más bodas al cielo. (57).

「もしこの結婚式から逃げおおせて、死ぬことがなかったら、もう二度と天国の結婚式には行かない」とは、どうにも解決しようもない難事に陥った者が、“もうこりごりだ、二度とこんなへまはしないぞ”と、己に言い聞かすときに使う表現。

155) Siempre te quise bien y nunca te hize bien. (159). 「私は常にお前を可愛がったが、お前によくしたことは決してなかった」とは、ある人のためを思えば、あまり親切にしてやるのも考えものだ、と教えたものか。

156) Si más queréis, por buen dinero. (154). 「もしお前たちがより多くを望むなら、十分なお金でもって」とは、魚心あれば水心、に当たるものか。

157) Si supiesse la hueste lo que haze la hueste, [mal para la hueste]. (112). 「もし軍隊が軍隊の行なうことを知っていたならば、[軍隊にはよろしくなし]」とは、物事をあからさまにして皆に知らせてしまうと、期待した結果、効果が得られなくなる恐れがある、と教えたもの。

158) Si tras éste que ando mato, tres me faltan para cuatro. (57).

「もし私の前に行くこの男を殺しても、四人にするにはまだ三人不足する」とは、ひとつの事柄を完全に仕上げるには、手間と時間とがかかる、と教えたもの。

159) So la color está el engaño. (121). 「色の下にまやかしがある」とは、物事を外見だけで判断するな、と教えたもの。

160) So el sayal ay ál. (105,121). 「ラシャ地の下に別ものがある」。意味は 159) と同じ。

161) Soplará el odrero y levantará Toledo. (117). 「皮職人が大きな息をし、トレドが立ち上がる」とは、借金などを人に申し入れたりすると、後始末が大変だぞ、と教えたもの。これは、1499年、時の宰相 Alvaro de Luna が、トレドに軍事費の貸付けを要請したところ、これを知った市民が暴動を起こした、という史実に拠ったもの。

162) [Tener en qué] escoger como entre peras. (124). 「梨の中から

のように選び出す「ものを持っている」とは、自分のため最良、最適のものをを選び出す材料に事欠かない、の意味を表わす慣用句。

163) Todos los duelos con pan son buenos. (110). 「パン付きの苦勞はすべてよし」とは、便利な方法とか先行きに見込みがあつてする仕事は、少々辛くても耐えられるものだ、との意味。

164) Trasquílenme en concejo, y no lo sepan en mi casa. (88). 「市会の中で私の毛を刈って、私の家ではそれを知らさないでくれ」とは、世間で評判を落した人が、自分の近親者にそれを隠そうとすることの愚かさを皮肉ったもの。

165) Un correverás y otro que te hallarás. (51). 「お前が見付けるこれやあれやの、バネ仕掛け人形」とは、大したもの、ことではない、の意味を表わす慣用句。

166) Uno piensa el bayo y otro el que lo ensilla. (134). 「鹿毛の馬はあることを考え、それに鞍を置く人は別のことを考える」とは、命令する人と命令を受ける人の考えとが、食い違うことを皮肉っている表現。

167) Un padre para cien hijos, y no cien hijos para un padre. (87). 「百人の息子には一人の父でいいが、一人の父には百人の息子でも不十分」とは、父母の子供への愛情の深さと、これに対し、子供の恩知らずな態度といったもの。

168) venir a la melena. (60). 「従う、屈従する」の意味を持つ慣用句。

169) Vezo pon que vezo quites. (123). 「お前、習慣を取り入れ、習慣を除け」とは、癖、習慣などは、後から改めなくてもいいようなものとなるよう心掛けよ、と教えたもの。

170) Yerba pace quien la paga. (132). 「牧草を食むのは、その草代を払う者」とは、苦勞した者にだけ、その報いを受ける権利がある、と教えたもの。

註 記

- 1) この部分、本文 (pág. 179) では 'por la víspera podéis sacar el disanto, y por la muestra podréis juzgar de la color del paño' となっている。現代語では、Por las vísperas se conocen los disantos とか、... se sacan las santos などという。

諺としては、今の様子からことの結末を推定できる、と教えたもの。

- 2) Diego de Valera (1412–1488); その歴史書, Valeriana で知られた歴史家であるが, これは Alfonso 賢王の Crónica general de España を簡約化したものにすぎない, との評もある。しかし, 15世紀と16世紀にはかなり広く流布し読まれた史書であったらしい。
- 3) los almonidas: Valdés のいうように, Coruñaの陥落は歴史的な根拠のないことのようにだが, これに近い史実としては, Almanzor (939–1002)が Santiago de Compostela を占領したということがある。したがって, los almonidasは, その時代の伝説に現われるアラビア人の一種族名と考えられよう。
- 4) La Celestina: Tragicomedia de Calisto y Melibea (カリストとメリベアの悲喜劇) を正式名称とする戯曲で, イスパニア文学史上, ドン・キホーテとならんで重要な作品と見做され, 戯曲としての価値に加え, 個々の登場人物の感情, 心理描写にすぐれたものとして, 高い評価を与えられている。作者, Fernando de Rojas はすでにでき上っていた第一幕を手に入れ, これに後の15幕を付け加えたといっている。しかし, 後に5幕が付加され, 合計21幕となったが, この最終版に仕上げたのは誰か, この点はイスパニア文学史上の謎である。なお, ここにある Sempronio と Parmeno は主人公のひとり Calisto に仕える下男である。なおこの作品は1499年の刊といわれる。
- 5) magnificat a maitines: 「夕べの祈りとなえるマリア讃歌 (Magnificat) を暁の祈り (maitines) に」とは, まったく場違いなこと, 見当外れのことを意味するとき用いる比喩的表現である。
- 6) Cuestiones del amor: 16世紀初頭に刊行された散文, 韻文による一作品。
- 7) Cárcel del amor: Diego de San Pedro により, 1492年に初版の出た, 愛をテーマとした散文の書, 出版後はイスパニアのみでなく, フランスでも評判となった, といわれる。
- 8) Esse es rey, el que no ve rey: 「王の见えない人, その人が王である」とは, 権力の座は, 人の正確な判断を迷わせることが多い, と教えたもの。なお, ラテン語文の文意もこれに等しい。
- 9) Malo verná que bueno me hará: 「私を善人にするような悪人も来るだろう」とは, 今はどんなに悪い人, 悪いことに思えても, 明日, 明後日となればまた違って見えてくるものなので, 悲観したり, 即断したりすることはない, と教えた諺。ラテン語文も同意。

- 10) Hoy por mí y cras por ti. 「今日は私に、明日はお前に」とは、今日は人の身、明日は我がの身。テキスト、150ページに前出。ラテン語文も同意。
- 11) Malo es errar y peor es perseverar: 「悪いのは間違えること、もっと悪いのは頑固に言い張ること」とは、過ちは素直に改めるべしと教えた諺。ラテン語文の意味も同じ。
- 12) ここで問題となっているホラティウスの2行にはラテン語特有の *hipérbaton* がみられるので、逐語訳では文意はつかみえない。したがって、ここに Valdés が示しているようなイスパニア語としての訳文が必要となる。
- 13) hogaño, ogaño は「今年；現今」の意味をもつ副詞。現代語では文語的になりつつある。
- 14) ahora, agora の語源は *ad horam* をとるのが通説になっている。
- 15) Ni al gastador que gastar ni al endurador que endurar: 「浪費家には浪費すべきものが、節約家には節約すべきものが」とは、お金などは、人それぞれの性格や考え方などに応じて、随分とその使い途がちがうので、人に金を預けたりするのは慎重に、と教えたものか。
- 16) No [es] por el huevo, sino por el fuero: 「ことは卵のためでなく、むしろ権利のめ」とは、喧嘩や交渉事にあつては、体面と筋論とかが優先し、実益が考慮されることは少ない、と教えた諺。
- 17) Quien cabo mal vezino mora, horas canta y horas elora: 「悪い隣人の近くに住む人は、何時間も歌いまた何時間も泣く」とは、住む場所を選ぶときはその周りの様子を十分調べよ、と教えたもの。
- 18) Quien las sabe, las tañe: 「その出来る人がそれを弾くべし」とは、何か能力のある人はとかくそれを外に出したがるものだ、の意味。
- 19) Caséme con la cevil por el florín: 「私は金のために、下賤な女と結婚した」とは人の気持、愛情などを金で買おうとしても駄目だ、と教えたもの。
- 20) この部分、テキスト (pág. 191) では '*mudar costumbre es a par de muerte* となっている。
- 21) この部分テキスト (pág. 192) では '*...aún os queda la cola por desollar*' となっている。これは *desollar la zorra* (狐の皮をひんむく → しぼって・ふっかけて人から必要以上に金品をまき上げる) という表現をもじったものといえる。色々理屈をいってやまない Valdés を狐に見立て、その尻尾の皮をひんむくこと、つま

り、一泡吹かせるようなことがあると、いいなかったのであろう。

- 22) この部分、テキスト (pág. 194) では 'ya no puede ser más negro el cuervo que sus alas': 「烏はその羽根よりも黒くはなりえない」となっている。これは、事態などがもうこれ以上に悪くなることはない、との意味の比喩的表現である。
- 23) これは Pacheco がこの国語問答の冒頭の部分 (pág. 15) で、「私もエラスムスがラテン語の諺集を出したのをみて、これと同じようなカスティリア語の諺集を出したく思い、準備をしている」といったことを受けての発言である。
- 24) これはホラティウスの書簡集の一節をもじった文言である。原文は、'Quod si cessas ant strenuus anteis nec tardum opperior nec praecedentibus insto' となるらしい。また、この部分テキスト (pág. 195) では、'¿ Oyes ? Dame el cavallo...' となっているが、これは、Valdés が、早くナポリに帰るために馬の用意をするようにという意味と、暗に Pacheco に仕事を勧めるためにいった文言中に現われる馬、とに掛けた掛け言葉になっている。